

別冊 I メイト便り第 21 号

I メイト 交流の愉しみ

ーアジアの多文化共生に向かってー

NPO 法人 アジアの新しい風

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414
TEL/FAX 03-5426-6714 <http://www.npo-asia.org>

2025 年 10 月 20 日 発行

目 次

まえがき	副理事長	奥山 寿子	・ ・ 3
1、上野千鶴子氏講演要旨			
	正会員	浅山 久美子	・ ・ 4
2、高齢化社会の課題（上野千鶴子氏の講演を聞いて）			
・ 北京第二外国語大学 OG	唐 靈慧		・ ・ 5
・ タマサート大学 OG	ドゥアンケオ・ヌットラー		・ ・ 7
・ 清華大学 OG	金 秀仁		・ ・ 8
・ 貿易大学 OB	グエン・ダン・ソン		・ ・ 10
正会員	島村 美智		・ ・ 11
・ 架け橋グループ OG	金 佑真		・ 12
・ 清華大学	雷 雅然		・ ・ 13
正会員	川口 祐子		・ ・ 14
・ 清華大学	谷 梓睿		・ ・ 15
・ 貿易大学	ズオン・フォン・タオ		・ ・ 16
・ ハンジャラン大学	セカル ヤスミン アリヤー		・ ・ 17
・ 正会員	林 孝男		・ ・ 18
タマサート大学	キイホップ・サップマハートム		
タマサート大学	ビッチャヤタイ・リムブン		
貿易大学	グエン・タン・タオ		
貿易大学 OG	ド・フォン・アイン		
貿易大学 OG	ダオ・ティ・ミン・グエット		
貿易大学	ドアン・トゥエット・ニー		
・ 正会員	高橋 雪子		・ ・ 22
・ 正会員	吉岡 京子		

3、奨学生・オンライン座談会

・ ・ 23

司会	奥山 寿子
タマサート大学 OG (第1回)	仲村クスマー
清華大学 OG (第2回)	王 鶴
貿易大学 OG (第4回)	ドウ・アイン・トゥ
貿易大学 OG (第5回)	ド・フォン・アイン
清華大学 OG (第6回)	施 奕敏
貿易大学 OG (第7回)	レ・ゴック・トゥイ
顧問	上 高子
<清華大学 OG (第3回)>	王 隽淇>

4、出前講座・オンライン座談会

・ ・ 28

正会員	大石 純
正会員	難波 美慧
賛助会員	汪 永香
賛助会員	王 鶴

5、編集後記

・ ・ 33

名誉顧問	上 高子
正会員	原谷 洋美



アジアの多文化共生に向かって

副理事長 奥山 寿子

今年のアジアの新しい風総会では、総会後にフェミニズムの旗手である上野千鶴子先生に介護保険と少子高齢化についてお話しいただきました。少子高齢化の問題は交流国のどの国にも起こりうる現代社会の大きな課題です。講演の反響は大きく、講演についての感想とともに各国の事情や自分の家庭や身内で起こっている問題について、それぞれの国の倫理観や家族に対する考え方、政府の施策が書かれた原稿が寄せられました。さらには、遠い存在だった上野先生のお話を生で聞けた感動を綴った人もいて、事務局を喜ばせてくれました。別冊ではこれらの感想や、会員との意見交換をまとめました。

「多文化共生」とは言い換えれば「平和共存」です。言い古された言葉ですが、アジ風は創立以来、アジアの平和共存、その先の世界平和を標榜し、今まで多くの海外の日本語学習者と交流してきました。

若い彼らが日本語を学んだきっかけは様々ですが、学習動機は何であれ、彼らは確実に日本に関心が向いている若者です。彼らが大学を卒業して、日本語の強みを生かして、現地の日本企業に、あるいは来日して日本で就職するにせよ、自国と日本の架け橋になっていることは22年のアジ風の歴史のなかで実証してくれています。

しかし、人と物とお金が自由に行き来するグローバル化を推進してきた欧米各国の多くで、その反動なのか、近年は保守派が支持され、外国人の入国や定住を制限し、自国ファーストの声が大きくなってきており、日本もそれを支持する人が多くなっているようです。

現在、在日外国人が390万人あまり。日本は彼らの知能、技術、労働なしには立ちゆかなくなっています。その彼らは今の日本の潮流をどのようにみているのでしょうか。居心地の悪さ、不快感を持っているとしたらこんな残念なことはありません。日本に定着した外国人が両国の架け橋になり平和共存していく道こそ、アジ風が目指している方向です。この機会に改めてアジ風の存在意義を考えなおしたいと思います。

『別冊Iメイト便り』は、アジ風新聞のIメイト交流を補完するものですが、今号ではOBOGの活躍ぶりの紹介を兼ねて、次のような企画もしました。

まずは、歴代の奨学生たちの座談会を誌面上で再現しました。アジ風の奨学金事業は2015年にスタートし、現在までに7名の学生が受給しています。彼らの研究、仕事、生活、アジ風への提言などを聞きました。さらに、中国語で清華大学の学生向けの就活セミナーを実施し、日本語に翻訳して掲載しました。日本企業の採用担当の日本人会員、日本に定住している中国人先輩たちが、日本での就職を考えている後輩たちに、日本企業への就職、社会保障、生活の現状などを本音で話してくれました。

これらの企画がコミュニケーションによる相互理解（平和）という旗を打ち立てていくための一助となれば幸いです。

今回の冊子にご協力をいただいた会員、Iメイト学生、そしてOBOGのみなさんに厚くお礼を申し上げます。

上野千鶴子氏講演会「日本の高齢者福祉 これまでとこれから」

上野先生は、日本では世界でも先駆的な高齢者福祉制度が整っていたが、相次ぐ法改正により、現在は厳しい現状にあると、世界やアジアを視野に入れながら説明してくださった。



まず、高い高齢化率の要因は衛生・栄養・医療・介護の水準が高いこと、それには誰かの助けを必要とするフレイル期間をいかに過ごすかが重要となる。それを支えるのが高齢者福祉制度で、日本では保険・年金・介護保険の3点セットが揃っている。特に介護保険法（1997年制定、2000年施行）は強制加入の国民皆保険制度で、40歳から支払い始め、国籍条項なしに65歳以上から受給可能、財源は税と保険の折衷方式により確保され、高い利用限度額と低い本人

負担（1割）を実現する画期的な制度であると讃えられた。

介護事業の主体（保険者）は自治体で、官・民などが提供するサービス事業者へケアをアウトソーシングし、利用者（被保険者）とサービス事業者との契約を仲介・監督する。一方、ケアマネージャー制度を導入し、ケアワーカーの資格・専門化を義務付け、利用者と事業者との契約関係が成立した。伝統的な家制度の下で女性の無償奉仕が支えてきた介護を、社会的契約関係に変えた。このような仕組みの日本の介護保険制度は世界に誇れる制度となり、同じ少子化問題を抱える韓国・台湾・中国もこの制度を注視している。

その後、介護保険市場は拡大し、不況期には成長産業となり、平成2年、2兆円だった規模が、今や11兆円に上る。介護サービス準市場の成立や女性の権利意識の向上、虐待の多い家族介護実態が明らかになり高齢者虐待防止法が成立、さらには、施設への偏見の払拭と施設志向なをもたらしした。

ところが、その後の同法の改定で応益負担から応能負担（1割から2～3割へ）になり、一方、ケアする側の賃金は抑えられ、介護人材不足と訪問介護事務所の激減を招き、人材が必要な「在宅ひとり死」が危うくなった。「最後まで自宅で」というのが多くの老人の悲願であり、その実現には高齢者の意志決定と司令塔（キーパーソン）、システム（多職種連携）が必要で、ハードルは高い。このままでは「在宅という名の放置」になりかねず、今や崖の上に立っている介護保険制度を次の法改正で修正し、現状と対抗しなければならないと、警鐘を鳴らされた。

最後に、アジア圏の現状にふれ、「今のアジアの最重要問題は高齢化と少子化である」と、少子化問題にも言及され、ケアモデルの国際比較をされた。高齢者のケアと育児はアジアでは女性にのしかかり、さらに養育費・教育費の高騰など結婚のコストは高くなる一方で、この家族規範とその高い家族形成コストから、結婚を事前回避する傾向にあり、この非婚率の高さが少子化へ繋がる。女性の労働力にはケアの公共化と市場化が欠かせないが、日本ではそのいずれも実現できておらず、ワンオペという言葉が出てくるほど、女性にしわ寄せがいつている。では、どうするか―上野先生は当事者主権こそが社会を変えるので、自ら活動することが必要と、上野先生たちが作られた「ケア社会を作る会（<https://wan.or.jp/article/show/11958>）」を紹介された。

（正会員 浅山久美子）

高齢化社会の課題（上野千鶴子氏の講演を聞いて）

偶然がつないだ講演会

唐 靈慧

アジ風歴 20 年 北京第二外国語大学出身
上海在住 （株）アマゾン勤務



アジ風の上高子さんと奥山寿子さんと夫と、山梨県の森にたたずむ蕎麦屋を訪ねた時、偶然に上野千鶴子先生と出会ってから 7 年。小さな縁が今や先生直々の講演に至るとは思わなかった。

その時は先生の東大入学式での祝辞を聞いて、「成功したのはあなたが優秀だからではなく、環境のおかげだ」という理念は初耳で、目から鱗が落ちる思いだった。後ほどマイケル・サンデルの『The Tyranny of Merit』という本を読んだら同じような考えを目にしたのも不思議ではない。

上野先生は今回、日本の超高齢社会において、介護保険の現状などを紹介してくださった。最近のニュースでは、日本の 2025 年新卒就職率が 98% だの、退職したお年寄りを再雇用するだのを聞き、超高齢社会というのは、どういうものなのかを少しは垣間見ることができた。

日本の現在は中国の将来。日本は高齢社会の歴史が長いので、サポート体系、特に介護保険制度は成熟して完備されている。中国が今直面しているのは、急速に高齢者が増えている社会で、年金・医療保険制度はほぼ網羅的にカバーできているが、保障の厚み、サービスの質、制度の洗練度は日本に比べて大きく遅れており、特に介護分野では大きな格差が見られる。

日本人のお年寄りの話から、老後今住んでいる家を売って、介護施設に行くのが普通だと分かってびっくりした。中国は儒教思想の影響もあって、親孝行はとても重視されている。それ故、親が孫の面倒を見てくれるように、親の老後に子供は一定の介護責任が義務づけられている。自宅や子供の家で老後を過ごすのが第一選択となる。

しかし、昔の一人っ子政策もあって、今や夫婦二人が四人の親を養うのはどんどん難しくなってくる。社会的な支援が整えば、子供が義務づけられた任務から息抜きでき、もっと次の世代の養育に集中できるだろう。

若者たちは今一生懸命働いて年金保険を支払っているが、老後に政府から年金がもらえるかどうか全然信頼が持てない。未来に悲観的な気持ちを持つ人も少なくない。しかし、先生がおっしゃった通り、「権利と制度は黙って向こうから歩いてこない。要求しないと得られない。」より良い老後生活を暮らせるようにするには、身近なことから関心を持たないといけな



上野先生はとても優しい声で、断固とした態度で来場の皆さんの質問に答えた。口調は柔らかいが、思想はとても鋭く、物事の本質を素早く捉える。社会学は抽象的な研究だが、現場の皆さんの質問を聞くと、一人一人の人間と、一つ一つの家庭に向き合っているのだと深く感じた。そしてアジ風も、抽象的な組織とは言え、実際にコミュニケーションをとっているのは一人一人の生身の人間なのだ。AIが発達した現代において、人間らしさがより一層輝きを放っている。

元 I メイトのひと言

唐さんとはアジ風創立以来 20 有余年のつきあい。日本留学時代はアジ風の事務局アルバイトをしてくれ、フランスの大学院で日本語教育の修士課程を履修中にはフランスで会ったりした。卒業後は上海で長く日本語教師をしていたが、今は転職して、英語で仕事をしている。7 年前に新婚旅行で来日し、上野さんに偶然出会った。一児をもうけた今も定期的にメール交流している。彼女は私の中国理解の窓口のひとつである。

(上 高子)



高齢社会の課題

ドゥアンケーオ・スットプラータナー

アジ風歴 16 年 タマサート大学出身

バンコク在住 マヒドン大学日本語教師



私は 30 代後半で、労働世代の視点から社会福祉について述べたいと思う。日本では、多くの国民が社会福祉制度に加入しており、医療費も自己負担は 3 割で済むため、安心して医療を受けることができる。一方、タイでは公務員の場合、基本的に国立病院しか利用できない。病気になると、朝 5 時ごろから病院に並び、診察が始まるのは 9 時ごろというのが一般的な流れである。会社員は労働者向けの福祉制度に加入しているが、制度の支援を受けられるのは指定された一つの病院だけである。それ以外の人は、すべて自己負担で医療費を支払わなければならない。つまり、タイ社会では、治療や健康管理は社会全体の課題というより個人の自己責任と考えられているのだ。

また、公務員以外の国民は、60 歳になると政府から毎月 600 バーツ（約 2,000 円）の生活支援を受け取ることができる。しかし、この手当だけに頼って生活するのはほぼ不可能である。年金や貯金がない高齢者の多くは、社会福祉や政府の制度に頼るのではなく、自分の子どもや孫に生活を支えてもらっている。一方で、子や孫も「恩返し」として最後まで親を世話することが当然と考えられている。もし世話をしなければ、周囲から「親不孝」と批判されることもある。

ただ、親の介護や医療費を負担しながら自分自身も働く子世代は、表向きには立派に見えるが、「将来自分が年を取ったときはどうなるのか」と不安を感じている。子どもがいない、貯金もない、もし難病になったら誰が面倒を見てくれるのかそれは次の大きな課題である。

日本では、介護が必要になった場合、介護保険を利用すれば施設で介護を受けることができる。しかしタイでは、近年こそ高齢者向け施設が増えてきているものの、費用が高額なため一般市民には利用しにくいのが現状である。また、多くのシニアは慣れ親しんだ自宅で暮らしたいと考えており、実家で生活すれば生活費も比較的少なくて済む。つまり、タイでは高齢者施設に入りたい人はまだ少なく、入所できる経済力を持つ人も限られている。とはいえ、タイ社会も少子高齢化が進みつつある。私自身も、老後を安心して過ごすためには、福祉制度をあてにするのではなく、若いうちから貯金することが必要だと感じている。そうしなければ、一生働き続けなければならないだろう。タイでは政府の社会福祉制度が安定していないため、完全に信頼するのは難しいと感じる。できるだけ自分自身の力で生活を支えられるようにしておくことが、将来の不安を減らす一番の方法だと考える。

元 I メイトのひと言

老人の道

各国の老人問題はそれぞれがおかれた経済その他の状況や、これまでの伝統、文化、老若のとりえ方など複雑に絡み合い、難しさを更に複雑にしているようだ。リボンさんの文を読んでいると、タイ人の優しさの土壌を感じ、また日本も当然のこのように老人を敬いお世話をしてきた歴史があったことに思い至る。意見を交わしあい、支える側、支えてきた側が互いに想いあい生きていける社会の迅速な構築が望まれる。

（森 郁子）

韓国の少子化現象についての考え

金 秀仁

アジ風歴 11 年 清華大学出身

韓国龍仁在住 韓国企業勤務



現在韓国が当面した様々な問題の中で一番話題になっているのは‘少子化現象’ではないかと思う。ある社会現象が単独で発生する場合はほぼないように、少子化現象も‘高齢化社会’、また‘ジェンダー問題’と密接な関係を持っている。そのため今回の上野千鶴子さんの講演を楽しみにしていた。

講演は高齢化社会の対策の一つである介護保険と少子化現象の原因を中心に扱ったが、私はその中でも少子化現象の原因についての内容に深い共感を覚えた。講演でも言及されたように韓国の出生率は世界で一番低い水準である。実際に生徒数の減少で廃校になった学校が多数あり、幼稚園や保育園でも定員未達でクラス

がなくなる場合がたびたび見られる。それで政府も様々な政策を実施しているが、今のところ、意味のある成果はないように見える。

出産支援金、保育料支援、多子女家庭の恵沢（多子女家庭は一般的に3人以上子供がいる家庭を指すが、最近は2人でも多子女に含まれる場合がある）などが代表的な少子化克服政策であるし、主に金銭的な部分に偏っている。これは人たちが子供を産まない一番大きな理由が‘お金がないからだ’という近視眼的な接近から始まったと思う。無論、子供を育つためにはたくさんのお金がかかるのも事実だが、私は出生率よりむしろ婚姻率の減少にもっと注目したい。

上野千鶴子さんは日本の男女平等指数を指摘して日本の女性が子供を産まないとする理由だとおっしゃいましたが、これは韓国でも同じく適用できる。韓国の婚姻率は30年前に比べて大幅減少したし、逆に離婚率は増加しているところである。甚だしくは4B運動（フォーB運動：非恋愛、非婚、非性関係、非出産を意味する言葉で、韓国語での‘非’の発音とアルファベットの‘B’の発音が同じ）を提唱する女性たちもいる。

このように極端的な思想が誕生した背景には女性に向かう絶え間ない差別と犯罪を言及しなくてはいけない。毎日 ニュースの一面を飾るとりどりの女性犯罪とそれに比べて軽い処罰は韓国社会の全般に不信を育てる契機になった。ゆえに自発的に男性との関係を縮小する人が増えたとし、このような社会で子供を育つのは不安だという判断の下で子供を産まない人たちもいる。また講演でも言葉が出たように共稼ぎの夫婦だとしても育児と所帯を受け持つのは全くほとんど妻の責任（韓国では‘督迫育児’と表現する）になるので結婚を忌避する傾向がますます強くなっている。昔のように男性の経済能力に必須的に依存する時代ではないので‘非婚’という選択肢が新しく脚光を浴びている。

韓国政府は少子化現象の深化で労働人口が減らすことや地域消滅についての心配を深刻に扱っているが、実際に女性たちが子供を産まない理由、さらに結婚自体をしないようにする理由を軽視したりあるいは回避する姿を見せている。無論、まえに説明したように少子化現象の発生には複雑な要因がある。そして自分の考えでは一番大きな比率を占めるのは男女平等の不均衡であり、もっとよい解決策を探すためには女性たちが経験している実質的な苦痛にもっと関心を傾けなければならないと思う。

上野千鶴子さんがおっしゃった通りに“権利と制度は黙って向うから歩いてこない”。1時間程度の長くない講演だったが、自分ができる役割について真剣に悩むことができる有益な時間だった。

＊編集部註

金さんの元 I メイト中村一郎さん（元理事）は、長いご闘病の末、去る 8 月 4 日に 77 歳で逝去されました。

韓国から中国の清華大学へ留学時代に、中村さんと I メイトとなり、帰国後も長く交流が続いていました。

訃報に接して、「中村さんとアジ風のお陰で、日本をもう少し幅広く理解、経験することができた」と感謝と哀悼の言葉を寄せてくださいました。

これからも I メイト O G としてアジ風と繋がってくださることを希望しています。



比較することで気づく高齢社会の課題

グエン・ダン・ソン

アジ風歴 5 年 貿易大学出身

日本在住 名古屋大学大学院

上野千鶴子先生のご講演を拝聴し、日本とベトナムの状況を比較することで、高齢社会の課題についてさまざまな気づきを得ることができました。



まず、日本では介護保険制度が整備されており、保険を利用する人は費用の 1 割だけを自己負担すればよいという仕組みがあります。例えば、介護サービスに 5 万 0320 円かかった場合、本人の負担は 5032 円です。一方で、ベトナムでは医療保険が全額をカバーすることもあります。実際の支払い額は少額で、サービスの範囲も限られています。そのため、金額ベースで見ると、日本の方が手厚い支援が受けられると感じました。

次に、講演の中で紹介された調査によると、「病院は亡くなる場所ではない」と考える人が日本では 77.9% に占めるとのことでした。また、「家に居たいと希望する人」が 54.6%、「医療施設に居たいと希望する人」は 27.7% というデータに私は驚きました。ベトナムでも同様に、多くの人が自宅で家族に看取られることを望んでいます。実際に、私の家族でも祖母や母が「病院ではなく、家で過ごしたい」と話しており、介護施設に入ることには否定的です。

また、上野先生が提示された介護の選択肢として、「他の国からの外部サービスの活用」「家族内での分担」「市場化」といったアプローチがありました。ベトナムでは今のところ、家族内での分担が一般的です。たとえば、祖父母が重い病気になった場合、子や孫が交代で介護を担当することが多く、特定の一人に負担が集中しないように工夫されます。さらに、ベトナムには「自宅以外で亡くなると魂が迷ってしまう」といった文化的な考えもあり、多くの人が最期を家で迎えることを望んでいます。

講演では日本の合計特殊出生率が 1.2、韓国が 0.7 と紹介されました。気になって調べたところ、ベトナムでも 2024 年には 1.91 まで低下しており、これは統計上過去最低の数字です。専門家は今後さらに出生率が下がり、高齢化が進むと予測しています。こうした状況を受け、ベトナムも日本のように高齢者福祉の政策に力を入れる必要があると感じました。

まとめとして、高齢社会における課題にはさまざまな立場や価値観が存在し、万人にとって完璧な解決策を見つけるのは容易ではありません。そのためこそ、医療制度や行政は多様なサービスや支援のかたちを整備し、個々のニーズに応じた選択肢を提供していくことが重要だと感じました。

国は違っても人々の想いは同じ

ソン君のＩメイト 島村 美智



高齢者福祉制度、介護保険というテーマは、本当に身近で、目が離せないと感じていたので、大変興味深く聞かせていただきました。

まず日本の介護保険が、国籍条項がなく、本人は一割負担、ケアワーカーは訓練を経た有資格者のみ、家族給付は行わないという、世界に類を見ない優れたものであるとのご指摘に、驚きました。当たり前と思っていた制度が、実は他国にも誇れるものであると知ったからです。しかし、介護保険、高齢者福祉制度は、改悪の方向に進もうとしていて、介護報酬の減額という『尋常ならざる事態』を迎えています。国の政策により崩れていく福祉制度を止めるために、政党に働きかけ、マスコミに訴える活動の大切さは、「ケア社会を作る会」の you tube から読み取れます。

本人の意思とは別に「家族の為に」施設に入る選択、在宅で介護保険を利用する選択、介護者が減り、福祉事務所が経済的に破綻し、「在宅一人死」となる選択、いずれも親の介護をし、次は自分の番と考える私自身にも、厳しい選択となります。

親、家族の介護は、女の仕事で、報酬の対象となるものではないという考えは、依然存在します。男は仕事、家は妻、嫁の仕事とされてきましたが、現在では男女ともに仕事を持ち、男といえども介護の為に仕事を辞める人も少なくない。死の直前まで壮年期のように生きるとは理想ではありますが、実現は難しい。介護に携わる方々の生活を守り、介護を必要とする老人が放置されることがないように、国に声を上げていくことが何より必要、また一方で、自分が介護される立場になった時、最期をどのように迎えるのか、決めることができず、迷い続けています。

ソン君によるとベトナムでは今のところ、家族内での分担が一般的で、たとえば、祖父母が重い病気になった場合、子や孫が交代で介護を担当することが多く、特定の一人に負担が集中しないように工夫され、「自宅以外で亡くなると魂が迷ってしまう」といった文化的な考えもあり、多くの人が最期を家で迎えることを望んでいるとの報告を聞き、国は違っても人々の想いは同じなのだと感じました。

弱者が安心して生きられる社会へ

金 佑真

アジ風歴 3 年 清華大学大学院出身

北京在住 中国中央電視台 (CCTV) 勤務



この度、上野千鶴子さんの講演会「日本の超高齢社会と介護保険の経験」をオンラインで参加でき、大変光栄に存じます。素晴らしいご講演に深く感動しました。言葉がこれほど強い力を持ち得るのだと、改めて実感させられました。

上野さんの講演を通じて、自分は日本の保険制度に対する理解を一層深めることができました。講演で上野さんは、「日本の介護保険制度がどんどん悪い方向へ行っている」と示しました。その一因として、介護職の賃金の低さが挙げられました。さらに、賃金が低い背景には二つの要因がありました。第一、ケア労働は普遍的に、(女性なら)誰でもできる労働だと思われ、その労働価値がまだ認められていないこと。第二、日本の政府側では、防衛費用の方が何よりも大事に思い、

介護保険に財力を使いたくないこと。その結果、介護労働がどんどん家族化、商品化され、金持ち老人はお金で介護を買い、家族のある老人は家族(主に女性)から介護してもらうパターンになったのですが、お金も家族もない老人は「在宅」という名をつけて放置される状況に陥っています。

「介護保険」というテーマを目にした時、今回の講演はフェミニズムと直接関係がないかと思いました。しかし、介護保険制度が直面している課題を知るうち、フェミニズムが解決しようとする問題は社会のあらゆるところに存在しているのだと強く実感しました。女性の仕事だと見なされ、軽視されるケア労働、弱者のために福祉をつくるよりも軍事力の強化を最優先する政府、フェミニズムはまさにこうした問題に気付き、解決策を模索しているとわかりました。上野さんの最後の講義—『これからの時代を生きるあなたへ』—の表紙に書かれたよう、フェミニズムは「安心して弱者になれる社会をつくりたい」という願いを抱えて前へ進んでいます。

繰り返しになりますが、上野さんのご講演には大変感動しました。言葉に宿る力に心を打たれました。弱者は、弱者になりたがって弱者になったわけではありません。私自身も社会の中では、まだ弱者に属するかもしれません。だからこそ、弱者の立場や気持ちを理解できるのだと思います。大学卒業後、自分は中国テレビ局で記者として働くことになります。実際の仕事の中には様々な困難に直面するかもしれませんが、精一杯、弱者の声を代弁し、弱者にとってより住みやすい社会の実現に貢献したいと願っています。

I メイトのひと言

金さんの感想を読み、上野千鶴子さんの講演がとても力強いものであったこと、そこから多くを学べたことが伝わってきました。介護労働の軽視や、防衛費を優先することで福祉が後回しになる現状への指摘は、私にとっても深く考えさせられるものでした。その学びをフェミニズムの視点と結びつけ、「弱者が安心して生きられる社会」への願いを将来の仕事につなげている姿勢が印象的で、私自身も社会の在り方を考えるきっかけをいただきました。

とはいえ、現在の世界情勢では、国家の存続を考えて、国防費の増額もある程度は仕方がないのではないかと思います。福祉と国家の安寧、税金の使い道は悩ましいところです。

(西尾のぞみ)

雷 雅然さんと川口祐子さんの感想交流

雷 雅然
清華大学 4 年生

雷さんの I メイト 川口 祐子



川口 → 雷

昨日は講演会の聴講お疲れ様でした。
上野千鶴子さんの講演はいかがでしたか？老人福祉関係のお話でしたのでちょっと難しかったですか？実は私も知らないこともあって、まさしく「目から鱗がとれる」お話もありました。雷さんの感想はどうでしたか？どこのお話が印象に残ったか知りたいですね。

私は自分の両親を兄と介護していましたので、「そうだったな～」と懐かしむ部分もあれば、考えさせられるお話もありました。特に病院や介護施設で亡くなる老人が多いという部分は思い当たる部分が多かったです。父は心臓が悪かったのですが、状態が急に悪くなり入院して、意識が段々となくなり意思疎通もできなくなって、そのまま退院できませんでした。母も通院日に朝から調子が良くなり診察された後そのまま入院して、一時元気になるかけましたが結局退院できませんでした。

たぶん両親とも自宅に最後は戻りたかったのだと思いますが、治療が必要なため自宅に戻る可能性は少なかったと思います。また退院しても私と兄で両親の生活フォローをできるかと言えば、現実には難しいと思っていたので、施設に入ってもらわなければということしか考えつきませんでした。まさに上野さんがお話されていた「施設に入るのは家族のため」という言葉通りだと思いながら聞いていました。「もし」はありませんが、もし退院して親の希望に沿う介護をするなら自分だったらどう動けばいいのだろうかと考えるきっかけを与えてもらいました。

雷さんの感想、疑問など、また中国と比べてみてなど意見交換できるといいですね。

雷 → 川口

メールありがとうございます。

講演の後に感想を交換できて嬉しく思います。

ご両親の介護に関する貴重な経験をお話くださり、胸を打たれました。人生の最期に、自分の願いと現実との間で生まれる葛藤は、誰もが向き合わざるを得ない課題だと感じます。先日の上野先生の講演会でも、私は多くのことを学びました。特に印象に残ったのは「介護は家族だけの責任ではない」という言葉です。

中国では、まだ「介護は家族だけの責任ではなく、社会全体の責任でもある」という考えについて、国民的合意は十分に形成されていないように思います。在宅介護であれ、施設であれ、負担の多くは依然として家族が担っているのが現状だと言えるでしょう。

また、「養児防老」という伝統観念もあります。これは孤独死を恐れたり、年を取ると自分を世話してくれる人がいないことを心配したりして、結婚して子どもを産むことによって、将来の介護を子どもに頼ろうとする考え方です。つまり、本心から結婚したいわけではなく、将来無援助状態への不安が結婚の動機となっているケースもあります。

もし社会全体で介護を共同の責任と捉え、こうしたプレッシャーも和らぎ、人々はもっと自由に生き方を選択できるようになるかもしれません。

しかし、日本のような介護保険制度を中国で構築するには、分配の公平性は大きな問題だと思います。実際、今の年金制度ですら、毎月一万元（約 20 万円）以上を受け取る人がいる一方で、二百元（約 4 千円）しか受け取れない人もいるという大きな格差を抱えており、多くの批判を浴びています。そのため、介護保険を導入しても、結局は一部の高所得者層だけのものとなり、大多数の低所得者層が制度から置き去りにされてしまうのではないかと心配されているのです。

簡単な答えのない難しい問題ですが、川口さんのお話から多くのことを考えさせられました。



文化と社会の側面から理解

谷 梓睿

清華大学 3 年生



今回の上野先生のご講演を通じて、私は日本の高齢社会の現状と対策について、文化と社会の側面から深く理解することができました。インターネット上では、「現在の日本の高齢化社会は、10年後の中国である」と言われることも少なくありません。ですから、日本の経験から学べることは非常に多いと感じています。

まず、上野先生は、高齢社会に対応するためには社会全体の意識転換が不可欠だと強調されました。高齢者のケアはもはや家族だけの責任ではなく、社会全体で担うべきものなのです。日本では介護保険制度が導入されていますが、先生はその限界や想定外の課題にも触れられました。例えば、自己負担額の高さや、サービス利用制限によって必要な介護を受けられない人が

出てきている現実、さらに介護職員の低賃金や厳しい労働環境などです。先生は、これらの問題は政府がより積極的に責任を果たす必要性を示しており、介護従事者と高齢者双方の権利を守ることが重要だと指摘されました。

現在、中国も急速に高齢化が進んでいます。中国には「孝」という、子女が親の面倒を見るべきだという伝統的な価値観があります。しかし、少子化や未婚化が進む中で、これまでと同じように家族だけに依存することは難しくなっているでしょう。このような課題に対して、日本が蓄積してきた経験は大いに参考となると考えています

高齢化はグローバルな課題であり、日本も中国も、介護制度の持続可能性や労働環境の整備、高齢者の尊厳ある生活の保障といった点で不断の改善が求められます。高齢者の生活を支えるだけでなく、その自己決定権と生活の質を尊重すること、さらに少子化が社会構造に与える長期的な影響を見据え、公正で持続可能な社会政策を構築していくことが重要だと強く感じました。

I メイトのひと言

介護保険制度の25年間の運用を通じ、「高齢者のケアは社会全体で担う」という考え方は日本社会に広く浸透しました。そして、介護保険サービスが充実したので「ひとりでも自宅で最期を迎えることができる」という上野先生のメッセージは大変インパクトがありました。しかし、そのサービスレベルを維持するためには国の財源が必要で、予算配分や少子化対策など他の社会課題との関連もあります。今後も、世の中の動きを注視しながら、「自分自身がどうありたいか」についても考えていきたいと思います。

(三木 京子)

ズオン・フォン・タオさんと原谷 洋美さんの交流

貿易大学4年生 愛称ボンちゃん

原谷 → ボンちゃん

こんにちは。久しぶりにメールをします。忘れられてしまったかな？

今ね、ひろみさんの家に真っ白くて香りのよい花生姜＝ハナショウガが咲いています。タイから来た1メイト達は、タイの匂いがする！！と言いました。ベトナムには何の花が咲いていますか。ベトナムはどんな香りが満ちているのかな。

ボンちゃんは4年生、インターンシップの論文やいろいろな課題が続くのでしょうか、きっと。がんばってくださいね。そんな忙しいボンちゃんにお願いします。

ボンちゃんには、おじいさんやおばあさんは居ますか？一緒に暮らしているのかしら。アジア風では「少子化や高齢化。老人福祉の問題」などで冊子を作ろうとしています。日本では核家族が多くなり、老後や介護問題が社会現象になっています。ベトナムではどうですか？そんなことを考えたり、目にしたりすることがあったら、ボンちゃんの思いやベトナムの現実を書いてもらえると嬉しいです。

ボンちゃん → 原谷

こんにちは。お久しぶりです。メールをいただいて、とても嬉しかったです！もちろん、ひろみさんのことを忘れていませんよ(^^)／

花生姜（ハナショウガ）を見たことはありませんが、きっととてもいい香りがするのでしょうか。ベトナムでは、今スアーという花がきれいに咲いています。甘くて少し強い香りが夜の街に広がり、「秋がもうすぐ来るよ」と知らせてくれるようです。まるで季節が静かにドアをノックしているみたいです。

はい、今は大学4年生で、中間のインターンシップの論文はもう書き終わりました。まだ他の科目と期末のインターンシップの論文もありますが、がんばっています(^^)／

祖父母は空の星になってしまいましたから、私は母と妹と暮らしています。ベトナムでは、まだ三世代で一緒に暮らす家庭も多いですが、最近は若い夫婦だけで暮らす家庭も増えています。都市部では、日本と同じように核家族が多くなってきていて、高齢者の介護も少しずつ社会の問題になっています。

「少子化や高齢化、老人福祉」についての冊子作り、とても良いテーマですね。

実は、ベトナムでも最近は高齢者が子どもや孫と一緒に暮らさないケースが増えてきています。特に「老人ホームに入れること」については、ベトナムや他のアジアの国でも賛否の声があります。アジアでは家族のつながりを大切に、「親孝行」という考え方が強いので、老人と同居しないことは「親不孝だ」と批判されることもあります。

でも、私の家でも祖父を老人ホームに預けた経験があります。最初は少し迷いましたが、祖父は施設で規則正しい生活を送り、介護スタッフのサポートもあり、以前より健康になりました。同じ年代の人たちと一緒に過ごす時間も多く、精神的にも明るくなったと思います。週末には家族が会いに行くこともできるので、絆は変わりません。私は、このような新しい形の「家族の支え方」も大切だと感じています。

それでは、季節の変わり目ですので、お体に気をつけてお過ごしください。いつも優しいメールをありがとうございます。ボンより



セカル ヤスミン アリヤーさんと原谷 洋美さんの交流

パジャジャラン大学3年生 愛称ヤスミンちゃん

原谷 → ヤスミンちゃん



ヤスミンちゃんには、おじいさんやおばあさんは居ますか？一緒に暮らしているのかしら。

日本では核家族が多くなり、ひろみさんもそうですが、高齢者は夫婦2人か、単身で暮らす人が増えて、老後や介護問題が社会現象になっています。インドネシアではどうですか？そんなことを考えたり、目にしたりすることがあったら、教えて下さい。

ヤスミンちゃん → 原谷

おじいさんとおばあさんの話については、ヤスミンには祖父母がいます。しかし、いっしょには住んでいません。祖父母は別の町に住んでいます。日本の「核家族」とインドネシアの家族の形は少しちがうと思います。いっしょに住んでいなくても、休みのときによく祖父母を訪ねます。祖父母の町へ行くのはとても楽しく、特に一人で電車に乗って行くときは映画のワンシーンのように感じます。

日本で起きている社会問題について聞きました。とくに、単身で暮らす人がふえていて、老後や介護の問題があります。じつは、このテーマをヤスミンのクラスでも、ほかの社会問題と一緒に話し合いました。おもしろかったですが考えさせられました。

原谷 → ヤスミンちゃん

おじいさんとおばあさんを訪ねるヤスミンちゃんの姿を、ひろみさんも映画のワンシーンのように思い浮かべていますよ。大好きで大切なおじいさんとおばあさんなのですね。

実はね、アジ風の発行する本で「高齢社会や介護」の特集を組んでいます。ヤスミンちゃんのクラスで話し合ったことを、聞かせてくれませんか？

ひろみさんは夫のお母さんを自宅で看取りました。ちょうど100歳で5年間寝たままでしたが、最後にはやりとげた思いに包まれましたよ。今は82歳の姉の痴呆症の心配をしています。老々介護というのかしらね。こんなことがヒントになると良いのだけれど。



ヤスミンちゃん → 原谷

ひろみさんは選ばれた人の方ですね。大変です。メールでも優しいから良く判ります。

インドネシアでは、60歳以上の高齢者は家で世話をするのが当たり前と思っています。介護という言葉もあまり使わないですね。まだ実感はないですがヤスミンもきっとそうします。クラスで話し合った割合は、半分以上が同じ考えでした。でも、時代の流れで変わるかも知れません。テーマのもう一つは、年金とか保険制度でしたが、まだまだインドネシアの国と同じように若いです。この話し合いとメール交換で、充実させていくべき課題だと気が付きました。

林 孝男さんと6名のIメイト

介護保険問題について、林孝男さんがIメイトとIメイトOB OGの6人に聞き取りを実施しました。

◆林孝男：今、それぞれの国においても少子化問題が切実に問題提起されております。



その先にくるのが老人介護問題です。これから少子化問題に対応して、それぞれの国や家庭で高齢化社会を迎えます。いずれ皆さんにもご両親、祖父母の生活や介護の問題が起ってくると思います。

自国における高齢者福祉問題についてのあなたの考え方を聞かせてください。

日本では25年前から介護保険制度が制定され、かなり充実しています。

あなたの国の老人介護福祉制度はどうなっていますか？制度として決められていることがありますか？又、あなたの家族に介護問題が発生した場合どのように対応しますか。

以下、6人からの回答です。一部Q&A形式です。

◆マックス（キティポップ サップマハーウドム）タイ・タマサート大学



タイもそんな問題が起っていますが、なんか不況で子供が欲しくない人も増えてきました。今のタイの老人介護福祉制度はちょっと良くないと思います。

お金がある人はお金が少ない人より便利なサービスを得られるのです。

未来の対策は私はまだ分かりませんが、政府は、誰もが福祉をもらえるサービスを作ったらいと思います。でも今もっと大事なことは不況の問題です。

◆林：少子化は不況が原因だと思うのですね。

◆マックス：はい、今の夫婦はペットを子供として育てるのが多いです。子供を育てるのはお金がかかるんですね。ただ自分の生活ではお金がちょっと足りなくて、子供を作るのは無理だと思う人がいっぱいいます。

◆林：お金がある人は老人介護が受けられるとの話ですが、どんな内容だか解りますか？

◆マックス：例えば、病気になった時、お金があればいい病院やいいサービスを得ることができます。タイでは貧しい人が病気になった時は長い列に並ばなければならない。福祉制度があるけどその制度は悪いと思います。

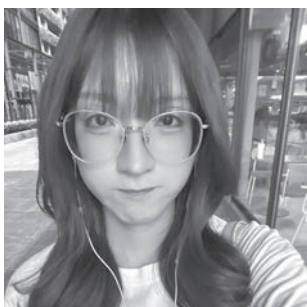
◆林：保険制度はないのですか？

◆マックス：タイにもありますが、公的保険制度はちょっと問題があります。民間保険なら大丈夫です。問題は先に言ったとおりです。

◆林：あなたの家族で介護をする必要がでてきたら、あなたは どうしますか？

◆マックス：私なら、お金がかかっても、父と母にいい病院のサービスを差上げます。保険制度はもうありますから。できるだけサポートします。

◆オパール（ピッチャヤティダ ソムブンニーン）タマサート大学



タイには高齢者を支えるための法律や福祉制度が整備されており、毎月の高齢者手当、「30 パーツ医療制度」、交通費の割引や無料利用などが提供されています。しかし、一部の高齢者や家族が十分に権利を認識していないこと、地域によるサービスの不均衡、長期介護にかかる高額な費用などの課題も存在します。

そのため、国や地域社会が協力して在宅介護サービス、家族への経済的支援、精神面のケアなどをさらに充実させることが、高齢者の持続的な生活の質向上につながるでしょう。

◆林：あなたの家族に介護が必要となった場合どう対応しますか？

◆オパール：両親が働いていて、住んでいる場所も離れているので、自宅で高齢者の介護サービスをお願いすると思います。

◆タオ（グエン・タン・タオ）ベトナム・貿易大学



まず、ベトナムではまだ日本のように整った介護保険制度は存在していません。

高齢者の生活や介護の多くは、基本的に家族が担っています。特に子どもが親の面倒を見ることは、伝統的な価値観として社会に強く根付いています。しかし、都市化や核家族化が進むにつれて、家族だけで介護を続けることが難しくなっているのが現状です。

とはいえ、家族による介護には大きな利点もあります。たとえば、高齢者は毎日子どもや孫の顔を見ることができ、家庭の温かい雰囲気の中で安心して暮らせるという点です。

私の家族の場合も、現在、祖父母（父方の祖父母と母方の祖母）は老人ホームに入るのではなく、田舎で叔父や叔母の家族と一緒に生活しています。そのおかげで、祖父母は孤独にならず、家族との交流を楽しみながら過ごすことができています。

制度面では、近年政府が高齢者向けの福祉施設や医療サービスの拡充に取り組んでいますが、まだ十分とは言えません。地方では施設が少なく、経済的な負担も大きいので、家族による介護に依存する割合が高いです。

私の身近で介護の問題が発生した場合、まずはできる限り家族で協力し合い、在宅介護を中心に対応すると思います。同時に、必要に応じて地域の医療サービスや民間の介護サービスを利用し、家族だけに負担が偏らないよう工夫したいと考えています。

今後、ベトナムも急速に高齢化が進むと言われています。そのため、日本の介護保険制度のような仕組みを参考にしながら、公的支援と家族の役割をバランスよく組み合わせていくことが重要だと思います。

◆ド・アイン（ド・フォン・アイン） 貿易大学 OB



私の国ベトナムでは、日本のような介護保険制度はまだありません。

高齢者に対する福祉としては、主に健康保険や高齢者への生活補助金がありますが、介護サービスそのものを支える制度は十分ではありません。

実際には、多くの場合、家族が介護します。これは文化的な背景もあり、子どもは親を自分で世話したい気持ちがあります。もし介護が必要になった場合でも、施設に入れるのではなく、ヘルパーを自宅に呼んで介護を受けることが一般的です。

例えば、私の祖父が入院したとき、両親や叔父叔母が交代で病院に通って世話をしていました。このように「家族で分担する」形が普通だと思います。

最近、介護施設や老人ホームも増えてきていますが、費用は平均的な年金額に比べるとまだ高く、また国からの支援もありません。そのため、利用はまだ限定的です。

私自身も、将来家族に介護の問題が発生した場合は、できるだけ自分で支えたいと思います。しかし、今後ベトナムでも高齢化が進むにつれて、家族だけに頼るのは難しくなるので、日本のように制度として整備されることが必要だと思います。

◆グエット（ダオ・ティ・ミン・グエット） 貿易大学 OB



ベトナムではまだ日本のような介護保険制度は整っていないくて、ほとんどの場合は家族と一緒に暮らしてお世話をしています。

もし私の両親や祖父母に介護が必要になったら、まずは家族で協力して支えていきたいと思います。同時に、地域のサービスや公的支援も活用しながら、家族が無理なく生活できる形を考えたいです。

◆ニー（ドアン・トゥエット・ニー） 貿易大学



高齢者の介護・福祉の問題について考えをまとめました。

1、ベトナムの公的制度について

ベトナムでは以前から、高齢者に対する社会保険や医療保険の制度があります。年金に加えて、生活が困難な方や正規の職に就いていなかった高齢者には、毎月の補助金が支給されています。

2、ベトナムの高齢者福祉の現状

近年、ベトナムの高齢者福祉・介護のシステムは良い方向へ発展し始めています。

国の政策に加えて、老人ホームの数が増え、設備やケアの質も良くなっています。リハビリテーションなどの治療法も多様化し、効果が上がっています。私の家族も、祖父母のためにこれらのサービスを利用しています。

また、多くの高齢者が子どもの家で暮らしているというベトナムの状況に合わせて、老人ホームが医師や看護師を自宅に派遣し、定期的な診察やケアを行う訪問サービスもあります。

しかし、伝統的にこの介護の責任は家族が負うものだという考えが根強く残っています。さらに、これらの老人ホームの費用は一般家庭の平均的な出費と比べるとかなり高いため、介護が必要な高齢者がいる家庭にとって、費用の負担は依然として大きな問題です。

3、自分の経験と将来の対応

現在、私の祖父は、高齢者ケアセンターの医療サービスと、家族によるケアを並行して利用しています。もし将来、このシステムに大きな変化がなければ、私も能力の範囲内で、同じように家族のケアに対応したいと考えています。また、家族の安全を確保するために、健康状態を追跡するアプリや、スマート監視デバイスを積極的に利用するつもりです。

ベトナムのケアセンターは医療やリハビリのサービスは非常に優れていますが、利用者や交流の活動が少なく、少し「病院」のような、孤独な雰囲気があります。

やはり、高齢者の精神的な健康をサポートするためには、家族の存在が必要不可欠と感じています。

個人的には、将来ベトナムでも日本のような介護保険制度が整備され、家族の負担が軽減されるとともに、高齢者同士が交流できる機会が増えることを強く願っています。

◆林孝男さんのコメント

私は今、病気になった妻の介護を抱えており、今回の講演は身近に感じながら興味深く聞かせていただきました。

若い皆さんもそれぞれ身近に感じながら感心を持っていることがわかります。ベトナムやタイでは日本のような保険制度はさほど充実していなくて民間の保険制度でカバーされているようです。これらの国は家族制度が浸透していてほとんどは家族親戚に頼って解決されているのが現状のようです。病院に行くにも、介護を受けるにもお金次第で、日本の介護保険のような制度整備が望まれます。

そして少子化問題は、それぞれの国で多少の違いはあるようですが、経済的理由で子供を産むよりもペットで代用しているとか、共稼ぎが多い国では親や親族を頼って子供を育てるのが恒常化しているようです。

日本の介護保険制度はとても優れているのだなと再認識させていただきました。

会員からのメッセージ

22 年前のあの暑い夏の日から

正会員 高橋 雪子

「アジアの新しい風」の総会にオンラインで参加させていただき上野先生の講演を拝見し、大変、参考になり感動致しました。

私自身が母の認知症が進み、介護のためにやむなく 30 年勤めた会社を早期退職しその年に導入された「介護保険」のお世話になりながら見送った 25 年間の体験と重なり感慨深いものがありました。

介護保険の導入当初は行政も利用者も初体験？で不慣れなため、いろいろありましたが最近では「よくぞここまで来た」と思えるほど、改善されつつ、進んで来たと思います。

古来から日本の「親の介護は家族、子供がすべきもの」との「儒教の孝の概念」が「介護保険を活用して社会が皆で看る」との変容したのは素晴らしいことです。

また、最近では「老人ホーム」の施設の進歩、改善も素晴らしく、私も 80 歳を迎え子供もなく単身生活のため、万一に備え、病院併設の鴨川の「シニアレジデンス」を終の棲家とすることにして、快適な生活を過ごしています。

22 年前のあの暑い夏の日に名誉顧問・上高子さんのマンションの会議室でスタートした「アジア風」が、成人式を過ぎ老人問題が話題になるとは「光陰矢のごとし」。私を含めアジア風メンバーの高齢化も進み、若い世代の参加会員の増加が望まれますね。

世界の雲行きが何とも怪しくなりつつある今こそ、アジア風の設立趣旨「相互理解を深め、多文化共生社会の実現を目指し、アジアの平和とひいては世界の平和に貢献すること」を若い力と一緒に目指しましょう

サ高住よりもおひとりさま

正会員 吉岡 京子

母が施設に入ってほぼ 10 年になります。

それまでは、東吉野村の山奥で週 2 回のホームヘルパーさん、土曜日曜祝日に妹夫婦、時々私が訪ねる程度で、私達姉妹は特に心配もせず大丈夫だろうと思っておりました。丁度、10 年前の秋に家の土間で焚火をした跡を見つけから、大慌てで東吉野村のお医者さんに相談したのが始まりです。一人で生活することは無理だと判断され、施設への入居を勧められました。吉野郡内では空き室が見つからなかったのが、妹が大阪で探している時に、偶然にも知り合いが新しくできた老人健康施設を紹介してくれました。最初の説明では、最長 6 か月までの入居ということだったのですが、法律が変わって、現在までずっと住み続けています。

努力もなく、良い施設に巡り逢えたのは、母の運が良かったからだと私は思っております。

上野先生のお考えに、私は共感しております。

サ高住よりもおひとりさまだと思います。

アジ風奨学生オンライン座談会

架け橋人材への期待

2025 年 7 月 26 日

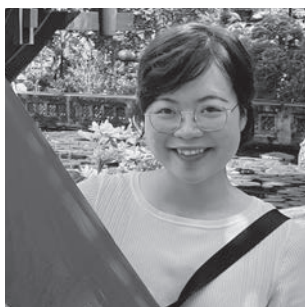


奥山：「アジ風奨学基金」は設立後ちょうど 10 年になります。コロナ禍の 3 年間は受給生がなかったので、合計 7 名の奨学生が誕生したのですが、この度、第二回目の奨学生座談会を ZOOM で行うことになりました。この 7 名全員の採用に係わって来た上高子名誉顧問と私が、皆さんといろいろな率直なお話をしたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。

(7 名の一覧表をご覧ください。王隽淇さんは在上海で今回の座談会には不参加ですがメールで近況が送られて来ました)

(表－1) (出身)

第1回生	クスマー・タイニコン (仲村) さん	タマサート大学卒	琉球大学院修士課程修了	人文社会科学研究科
第2回生	王鶴(オウカク) さん	清華大卒	一橋大学院修士課程修了	商学研究科MBAコース
第3回生	王 雋淇 (オウシュンキ) さん	清華大卒	一橋大院修士課程修了	経営学研究科
第4回生	ド・アイン・トゥさん	貿易大卒	神戸大学院修士課程修了	経済学専攻科
第5回生	ドウ・フォン・アインさん	貿易大卒	神戸大学院修士課程修了	国際経済学
第6回生	施奕敏 (シエキピン) さん	清華大卒	東京大学院修士課程修了	情報学環・学際情報学
第7回生	レ・ゴック・トゥイさん	貿易大卒	早稲田大学院修士課程修了	アジア太平洋研究科



奥山：まずはみなさんから今どのような仕事に携わっているか、という自己紹介をいただきましょう。それぞれにご活躍ですが、代表して第4回生のトゥさんから話してもらいます。

トゥ：京都にあるお香の老舗で働いています。ベトナムでも、毎日炊く芯の太いお香の習慣はありますが、日本とは少し違います。ここではお香だけではなく、リラックス用の線香や、におい袋も作っています。日本の伝統的な文化に触れられて、毎日本当にいろいろな勉強になります。京都の人は国内ではあまり評判が良くない

いと聞きますが、私の周りの人たちはすごく良い人ばかりで、本当に恵まれている環境で離れたくないです。本当に毎日感謝していますよ。

上：ずいぶん謙虚ですね。日本企業で働いて、嫌だ、嫌だ、などと思っている話を聞くと辛いけど、自分にピッタリくる会社に入れたのはラッキーでしたね。

トゥ：5 年目になりますけど、まだ毎日気づきがあります。おもてなしとか、いろいろ勉強させていただいてます。毎日、本当に穏やかに過ごしています。

奥山：他のみなさんのご紹介は、次ページの一覧表からご覧ください。

(表-2) (現在の仕事)

クスマーさん	結婚して子供が生まれたので、今は翻訳を中心にフリーランスの仕事
王鶴さん	卒業後は保険会社で5年間勤務。現在は証券会社エトレーダー。財務分析表を見るのに役立つ。
王シユンキさん	IT関連中国企業で4年間勤務。現在ゲームの国際マーケティングを担当している。
トゥさん	京都にある老舗のお香の会社勤務
アインさん	元メイトの紹介で来年4月から東京のIT企業に就職。
施さん	卒業後10月からアメリカの外資系企業に就職。東京勤務。
トウイさん	来年3月卒業後ベトナムへ帰国して、日越に係わるNGOに仕事を見つけたい

奥山：大学院で取り組まれた研究テーマと、今の状況に関係があるかどうか、なくても構わないのですが、もし研究が役立っていたなら、そのことも含めてお話しください。

アイン：私は修士論文を先日提出しました。今は最終審査の準備中ですが、「自由貿易協定がベトナムの水産物輸出に与える影響」という研究テーマです。RCEP アールセップというアセアン 10 か国間の世界最大の協定なのですが、このたびのトランプ米大統領の関税問題が、私の研究にも関連して、どう影響するか分析のために、数値の変動を追うのが大変でした。



(表-3) 修士の研究テーマ

クスマーさん	伝統文化の継承 タイと沖縄の比較研究 (今は直接関係ない)
王鶴さん	企業の上場廃止、M/Aなどについて。今は債権を扱う証券会社で働いているので多少は関係ある。
王シユンキさん	社会的規範がゲーム内課金の意欲に与える影響について。今の仕事で、異なる文化背景のゲームユーザを理解するにはとても役に立つ。
トゥさん	国際金融のトリレンマについて。今の仕事と直接関係ない。
アインさん	IT企業に働くので、研究テーマが直接かわるかどうか不明
施さん	日本人の中国に対する認識の世代差について。熟年層の対中感情の悪化、若年層は悪くない
トウイさん	日本企業のジェンダーギャップに焦点を当てた。これから日越の懸け橋となる仕事に就きたい。

奥山：それでは次に、アジ風の活動は I メイト交流が中心ですが、みなさんは元 I メイトとの関係はどうでしたか？あるいはどうですか？施さんからどうぞ。



施：はい、元 I メイトの園田さんとは、清華大の 2 年生からずっとつながっています。日本へ留学してからも、毎週基本的には一時間ビデオチャットで交流しています。半分は雑談で、あとの半分は、夏目漱石の「坊ちゃん」という小説を読んでいます。読みながら日本語を理解しつつ会話をしていく、みたいな感じです。現役の頃は「日本昔話」でした。

奥山：継続的にそういう交流をして、本音のところでしんどいと思ったことはないですか？

施：いや、全然ありません。むしろ園田さんが大変だろうな、と思うことがありますけど。

奥山：そうですか、本当に忍耐よね。でも、お互いに「継続は力なり」ですね。

表-4 (元1メイト)

クスマーさん	城谷健一さん。病のため退会され、現在は古海理事がサポーター
王鶴さん	河村新造さん。3年前に逝去。9年間のメイト交流だった。
王シュンキさん	奥山正昭さん。現在在中国で、ウィチャットやメールでの交流のみ。
トゥさん	曾我部健さん。年末年始にラインで挨拶など限られているやりとりの中でも暖かい思いが通じる瞬間あり
アインさん	林孝男さん。就職活動では貴重な支援を受け、IT企業に就職できた。関西へご旅行時に数回会食した。
施さん	園田成和さん。現役メイト以来5年のお付き合い。
トウイさん	岩切祐樹さん。現役会社員で多忙のため退会され、現在は古海理事がサポーター

奥山：基本的に1メイトとの繋がりを大事にしてほしい、一対一の関係を長く続けてもらえたらうれしいと思いますが、最近はコミュニケーションの手段が変化してきて、いろんな形の交流があると思うので、それほどこだわらなくてもいいですよ。またみなさんは忙しいでしょうから、アジ風の交流会に頻繁に参加できなくても、どこかで活動を見ていて、気が向いたら、あるいは事務局からお願いをしたら参加してもらおうとか、そういう緩くても長続きする関係でいれたらなあ、という風に望んでいます。「草の根の相互理解を通して多文化共生」という理念は変えないつもりですが、事務局メンバーも変わって運営の仕方にも変化があるでしょうから、みなさんの要望や意見を聞かせてください。

クスマー：学生の頃は、アジ風の活動に参加することが楽しみでした。日本人の友達があま



りできなくて、アジ風に来るとやっぱり日本人と大勢会えるし、日本文化に触れられてすごく楽しみだったんです。世代が違ってからの、ものの見方や考え方も違ってくるし、結構すごく自分の成長に役立ったと思います。でも卒業したら忙しくて、参加機会が減りました。日本食の料理教室や普通の留学生は知らないもの、日本人でなくては知らないということなど、そんな交流がおもしろかったですね。

奥山：通信の手段もいろいろあって、PCメールは余り見ないようですね。ラインとか、メッセージとかを優先しているようですし。この奨学生のライングループを作るとかもいいかもしれません。

王鶴：留学生は中国へ帰ると、ラインはダメですから、ウィチャットが望ましいです。

奥山：アインさんから提案があったような、小さい交流会を増やすと、事務局の負担が少し少なくなるかも、と感じますね。

クスマー：日本文化だけでなく、他の国の文化もお互いに紹介するなど、小規模でもいいので。あとはおしゃべりや日本語以外の語学の勉強も。バラバラにそういうのをするというのではなくて、一つそういう小規模の集まりを作ったらどうでしょう。

上：いいですね。問題は場所です。みんなが来やすい、そんな場所を探しています。

奥山：JICAの無料室を借りることもできますよ。

上：ここで、私から、みなさんへメッセージがあります。奨学基金が設立して現在まで7名の受給生ができました。「懸け橋となる人材を育成する」これが目的です。アジアの新しい風の設立目的、私と奥山さんたちが皆考えて定款を創ったのですが、「平和を希求する」。これなんです。平和。とにかく戦争がない世界を目指したい」と。そのためにはどうすればいいか。お互いにそれぞれ自分の文化が一番だと。文化というか、自分に近いものがよい、大事、とほとんどの



人間はみんなそう思うのです。けれども、それを言ったら絶対エゴとエゴのぶつかりあいです。他国の人たちのことも分かるようになりたい。お互いそれぞれに理解し合う。外交とか偉い人たちだけでなく普通の人たちが、相互理解を進めるための組織を作りたい、というのが最初の動機ですね。

じゃあどうするか、相互理解には言葉が必要ですが、共通の言葉はどうする？となり、たまたまこのNPOを立ち上げた者に日本語教師が多かった。それで日本語で、となった。日本語を教えているうちに、日本にはこういう特徴がある、これはいいところだけど、

これはまずい、などそういうことが分かってきて、多くの日本人とシェアしたい。「多文化共生」がすごく大事だってことが分かったからです。

だから、日本が一番だとか、優れているとか、訴える気持ちで、活動をやっているわけではないのです。もちろん日本人だから、日本を良くしたい、良く思われたいというのはありますよ。だけど、それは皆さん他国のひと達もそう思っている。それを理解するために、Iメイトというシステムを作り、こういう方向でやってきた。そして設立後ほぼ10数年たったときに、具体的にそういうことを期待できる人材を創りたいとアジア奨学基金を創ったのです。皆さんも感じておられるように、私たちアジア風のメンバーはみな庶民です。普通の人たちで、政治家も権力者もない小さな組織で、会員は大方が元会社員だった人たちの集まりです。皆さんに募金して、奨学制度を回している状況なんです。

それが、最近の参議院選挙で、新しい政党が「日本人ファースト」と叫んで外国人排斥を訴えたのは知っていますか？日本はそんなに外国人や移民を受け入れてこなかった。やっと前向きに先進国並みに受け入れようとしたとき、そんなことを言う人たちが出てきたんですよ。危機感を持っています。これからも「多文化共生」はずっと訴えていきます。アジア風の奨学生であるみなさんは、私たちの気持ちを汲んで、とりあえずは自分の国と日本との共生、そしてアジアの相互理解を促進する懸け橋となる人材になってもらいたい。みなさんの感想を聞きたいです。

トウ：すごく感動しています。もう素晴らしいので、本当に感動ですよ。

上：あ、そう、それは嬉しい。そんな言葉を聞けてすごくうれしい。

トウ：上さんと奥山さんには現役Iメイトの時代からお世話になりました。これからもみんなのために活動を続けてください。

上：これから先はそんなに長くは生きていられないと思います。でもそう言ってもらえるとすごく嬉しい。奥山さん、二人とも元気出たね。秋に神戸で交流会が予定されていますから、ぜひアインさんも一緒に参加して皆さんの間でお話ししてください。

トウ、アイン：はい、そうします。

王鶴：私たちはまだ若いので、目先のことしか考えてないんですね。中国の実家周辺にいる人たちはいろんな世代と接しながら生活していると思うんですけど、日本で日頃触れ合うのは同年齢の人たちばかり、年上の人たちからの話はあまり聞かないし、上さんや奥山さんのお話は

とても大事です。人生を振り返ってみて、何が一番大事なのか、話をいただけるのはとても貴重です。

上：王鶴さんが言っているように、まだ皆さんは若いから、目の前のことで精いっぱい、なかなか政治や世界のことに目を向けることが難しい。それはまったく私たちもそうでしたね。



奥山：Iメイト交流を始めたころのある元Iメイト学生が、40代半ばになって、ようやく私たちの後継者になろうとしてくれています。みんなも今は目の前のことに精いっぱい、なかなか難しいと思いますが、ぜひ長くアジ風とつながっていて、懸け橋の人材としてアジアのこと、世界のことを考えるようにして欲しいです。

王鶴：娘が目覚めたようです。（おしゃぶりをしているライブ）母親になってとても幸せです。夜は3時間ごとに授乳して疲れるけど、幸せな感一杯。

上：王鶴さんは、8月に女の赤ちゃんが生まれました。来年の春までは産休です。みんなもきっとそのうちこんな風になるわよ。

奥山：最後になりましたが、この中で一番新しい受給生・トウイさんから、修士論文の概要を話してもらえますか？トウイさんには9月21日の総会で司会を担当してもらいますし、この論文の概要を会員の皆さんへ話してもらいます。

トウイ：修論のテーマは、日本企業における「昇進機会とジェンダー障壁」です。高度人材の在日ベトナム女性10名を対象に、インタビュー形式でその傾向を明らかにする計画で、現在6名まで終了したところです。日本企業においては、女性の昇進機会に大きな障壁があるという仮定で、実態をレポートします



奥山：今日は本当にいろんな話が聞けて、充実した2時間でした。今後の活動に生かしていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。

なおオンライン座談会後に、第3回生の王隼淇さんからの近況メールは以下の通り。

[今年の3月に転職。今は上海にいて、Moonton というゲーム会社で仕事をしております。得意分野から離れて、今は主に北アフリカ、中東地区、南アジアなどの国の関連業務を担当しているのですが、言語も通じないし、現地の視点にも欠けており、勉強しなければならないことはいっぱいあります。また、ゲーム自体は東南アジアが主なターゲットなので、ムスリム向けのゲームイベントのプロモーションにも参加しております。知らないことが多くて、前のように自分でコツコツ頑張るだけでは足りないけど、現地の人や、経験のある人に連絡をとって交流することは大変重要になっています。4月にインドネシア、5月にエジプトに出張して、現地でユーザー調査を行いました。異文化交流はアジ風のみなさんとの交流で培った視点や考え方が土台になってとても役立っています。]



あなたの日本企業へのイメージは間違っていないですか？

2025 年 3 月 22 日

中国人学生が卒業後の進路として日本企業を選ぶ際、どのような問題があるのか、どんな不安があるのか、その解を日本在住の先輩たちに聞きました。

清華大学 陳朝輝先生のご挨拶



デジタルの発達や文化の開放等の時代背景に、中国の若者は海外での就職を以前よりも考えやすくなっている。そんな中、常日頃から日本語を勉強する学生の役に立つかを考えているアジ風からの提案で、このような講座が開催できたことは非常に有意義である。現役の人事責任者、長年日本企業に勤務している方等から直接話を聞くのは、普段 SNS 等から入手する情報とは違って、きっとより視野が広がると考えている。

目次

- | | |
|----------|---------|
| I 講座開催趣旨 | II 講座概要 |
| III 内容紹介 | IV 質疑応答 |

I 講座開催趣旨

a. 目的：日本での就職を希望する学生に、日本企業の職場文化の実情について、長年日本で仕事している現役社会人に聞く。また企業の採用担当から求められる人材について話してもらおう。それを通じて、将来の職業選択に役に立ち、一人でも多くの学生が日本に来るように応援することである。

b. 背景：日本での就職を希望する学生は中国の SNS などを通じて日本企業の職場文化について情報収集している。その情報に偏りがあるのではないかという思いや、個人の事情に合わせて質問することができない等の制限もある。それに対して、アジ風の会員の中には、来日 10 年から 20 年以上が経ち、様々な業界の企業で活躍している中国出身の先輩たちがいる。彼らの経験から学生達への正しい情報を伝え、リアルタイムで疑問に答えることは重要である。

II 講座概要

- a. ZOOM 会議の形式で中国語で実施
- b. 事前に学生達にアンケートをし、関心のある事項を講座内容にも盛り込む
- c. 参加者：清華大学生
- d. パネリスト：以下の 4 名

名前	現職	発表テーマ
大石 純	社名：三井住友トラスト・アセットマネジメント 常務執行役員(人事・財務・総務担当)	日本企業採用について
汪 永香	社名：韓東急総合研究所 副主任研究員(調査・コンサルティング)	在留外国人研究から抜粋して
王 鶴	社名：三井住友海上火災保険、みずほ証券 外国債券トレーダー	日本で就職や生活するのに迷っている友達の関心事
難波 美慧	社名：PwC Japan ビジネスアドバイザー コンサルタント (講座開催時)	司会&質問回答者

Ⅲ 内容紹介 パネリストの発表

1. 大石純：日本企業採用の概要について

日本企業採用の特徴は新卒採用とポテンシャル採用にある。新卒採用は入社後に集合研修を行うため、毎年3月に大学を卒業した学生を、4月1日に入社するために採用スケジュールが計画されている。

集合研修は、社会人としての常識やマナー、各会社の業務上必要な知識を集中的に行う。

集中研修の後に各部署に配置された後でも、業務上必要な研修が用意され、知識がなくても仕事ができるように教育プログラムが組み込まれている。

ポテンシャル採用とは、特例を除いて採用する際には、大学での専攻と業務内容との関連性は基本問わない。選考では、大学で業務に関係する知識を習得しているかどうかではなく、その人が会社の研修を受けたうえで業務においてそれを発揮できるかどうかを見る採用方法である。



採用にあたってのポイント

今までやってきたこと：日本の会社はポテンシャルですので、入社後の研修を受けたうえで成果を発揮できるかどうかを見極めるためには、いままでやってきたことについて選考で確認する。ここで、それまで注力したこと、勉強だけではなく、趣味や部活等も含めて、何を苦勞し工夫したか、何を成し遂げたかを説明したほうがいい。

日本語の語学力：日本企業は近年外国人の採用にも熱心ですが、周りの日本人と一緒に仕事できるくらいの日本語は要求される。

長く働けるかどうか：日本企業は入社後、長く働いてくれそうかどうかをよく見ている。日本企業は人材育成を熱心に行うので、育ててすぐ辞めてしまうと損失になる。特に外国人は短期で辞めてしまう傾向があるので、日本企業は特に注意して選考している。

2. 汪永香：在留外国人の研究からみた日本での就職について

日本には2023年12月現在324万人の外国人が在留し、中国人が82万人で24%を占め、一位となっている。

労働市場研究による2030年日本の労働市場に対する推測によると、サービス業や社会福祉業、卸小売業では人材不足が起きるが、中国の学生達が興味を示す金融保険不動産業では逆に30万人の人材余剰と推測されている。

現状、宿泊・飲食業、製造業、看護業界、建設業において外国人の採用が多く、金融・保険、交通運輸業等は採用が少ない。

日本企業において、採用実績がある企業は採用をさらに拡大する傾向にあるが、実績がない企業はそのまま現状維持という二極化している。入社後外国人の日本語の語学力や採用手続き等の面ではやはり課題が多いという研究結果がある。

実際働いている外国人は、仕事における語学不足や文化の違いに苦勞している。といっても、外国人は日本での生活は8割は満足しているという結果が出ている。



3. 王鶴：日本で就職や生活するのに迷っている友達の関心事

① 仕事そのものについて

給与面：金融業界に限定される話ではあるが、日系企業と外資系の違いは多少あるが、昇格しない限り、一定の給与が数年続く状況となる。収入アップを図るためにはよりハードな仕事に社内異動か転職するしかないのが現状。



仕事の強度：職種によるが、朝 8 時前出勤し 17 時に帰宅して、中休み 1 時間で集中して働くのが自分のスタイルには合っている。

日本語の語学力：専門的な業務においては使える日本語も限定されるし、企業内研修や資格勉強で習得することが可能。むしろ大変なのは日常の会話で、自分の言いたいことをよりエッジの利いた日本語の言い方ができないのは残念だ。

日本人と協議するときに、言葉がうまく表現できなくて負けることも悔しいときもある。

福利厚生：休暇が多いのが一番好きだ。

日本企業へ就職するための活動：ボストンキャリアフォーラム（CFN）がある。多数の日本企業がそこで中国人も含む外国人の採用のために参加しているため、チャンスも多い。東京フォーラムや大阪フォーラムもある。

日本企業を退職したのち帰国した人：元々清華大学出身で、中国では IT や金融業界に就職する人にとっては、日本での就職経験はあまりプラスにはなっていない。

一部は中国の実家の国営企業に就職する人もいる。

② 生活

友達作り：趣味のある人とは自然と友達になれるのであまり心配しなくてもいい。

結婚：結婚となると、ちょっと複雑だ。周りに中国人がいる生活圏の中、趣味や価値観が一緒に、将来一緒に中国へ帰国することもできるような、様々な条件が合う中国人の伴侶を探すのは難しいかもしれない。

消費：周りは同じくらいの生活レベルなので、焦燥感に駆られないことが一番いい。

夫婦共働きならば、不動産購入等も特に負担にはならない。

③ 両親

帰省：連休はあるが、帰省するには短い期間となり、両親と過ごす時間は少ないのが現実。

介護：人によっては悩みの種になるかもしれない。両親に日本に来てもらっても、日本での生活はあまり好きではない人もいる。子どもが生まれたら 7 年間は両親が日本に来るためのビザはあるが、7 年間後はどうするかなども解がない。

IV 質疑応答

「年功序列が厳しく、若い人はチャンスが少ない、ときいているが」

- ・伝統的な日本企業でも、年功序列による閉塞感を打開する人事制度等の施策も多く展開されている。

「日本で働くことのメリット。日本企業と中国企業の違いは何か」

- ・安全、安心、安定がメリットだと思われる。働くうえで穏やかな気持ちでいられる。

食の安全や治安がいいので、安心して生活できる。

- ・入社後の教育研修が充実していることや、終身雇用等はやはり安心して働くことにつながる。年金制度の充実もメリットである。
- ・日本企業での昇進が遅いのは現実だ。
- ・職業に対する差別等が少ない。

「語学専攻の学生が日本企業で働くためにどんなスキルが必要か」

- ・日本では「T 型人材」に対する考えが広がっている。これも日本語の語学力にも同じことが言える。
- ・どんな場合でも、相手（同僚、上司、顧客）に説得できるくらいの日本語力を意識して身に着けるべきだと思う。そのために、自分の考え、思想を伝えるための言葉選び等を日頃から訓練する必要がある。
- ・一方で、自分の専門分野において、日本人と同レベルの専門的な言語力を身に着けるための努力が必要だ。



「日本の社会の社会保障と企業の社会保障について」

＜難波美慧（張慧）＞

- ・一番の社会保障は終身雇用だと思われる。逆にどんなに仕事ができなくても、解雇されることがないという面でも不思議に思うときもある。
- ・国民みんな健康保険制度があり、医療費は 3 割負担で、高額医療費は上限が設けられるところが安心できると思われる。
- ・出産と子育てに対する制度は充実している。少子化の中で、出産育児一時金や保育園無償化の制度は良い。
- ・退職金・資産形成について、一部の金融業界では逆に退職金の前払いのような制度が採用され、他の業界のように、金額の退職金が支払われることがない。自分自身で老後の資産形成を考える必要がある。
- ・プライベートと仕事ははっきり分かれている。社会保障制度ではないですが、退社後や休日に会社から電話がかかってくることはない。中国のように、休日でも SNS で上司から連絡を受けるようなことはない。
- ・住宅を借りる場合の補助制度はありがたい。

「日本企業が中国人を採用する意欲があるかどうか」

- ・すべての企業にあるとはいえないが、多くの企業は中国人を採用する意欲があると考えている。採用されている中国人は非常に優秀である。

「中国の学歴だけで日本企業に就職できるか。どうやって応募すればいいか」

- ・日本のリクルート企業が中国で開催している「就職合同フォーラム」のようなイベントに参加して、日本に行くことなく就職できた経験がある。
- ・一部の中国企業は中国の学歴だけを選考し採用している。日本にある大学の学歴はかならずしも必要ではなく、日本での学歴があっても有利になることはない。
- ・日本にいない中国の学生でも、日本のマイナビ等の就職サイトで、日本語で応募し、選考され採用された実績もある。

- ・ほかにも、日本企業のサイトから応募する方法もある。場合によっては、ONLINE 面接で採用されるケースもある。
- ・中国の大学と日本企業との間に優秀な学生を紹介するプログラムがあり、それを通じて、中国の大学を卒業してすぐ日本に来て就職する人もいる。

「日本での留学期間が短い中国の学生向け、日本人向けの採用スケジュールとは異なる特別な採用イベントはあるか」

- ・金融業界に限っていうと、入社後の集合研修があるため、新卒向けの採用活動は先ほど説明したスケジュールで動くのが基本。海外事業展開がある商社やメーカーにおいて、留学生向けの採用スケジュールがある。
- ・そのスケジュールからずれた場合は、いわゆる「中途採用」の枠の中で、臨時的に留学生向けに開催されることがある。就職活動情報サイトに注意してほしい。
- ・会社によって、留学向けの特別採用枠もある。4 月入社のほかに、留学生向けの 9 月入社の枠もある。就職活動情報サイト、OPENWORK 等を幅広く入手すること。

「日本で留学する学生にとって、日本の一流大学ではない大学を卒業した場合は、日本企業はその学歴について選考上、どう見ているか」

- ・以前は学歴を重視する傾向はあったが、最近は多様性を重視する企業が増えた。
- ・伝統的な企業は、学生の人格的な面も重視することもある。
- ・書類選考の通過率は 50% ですが、1 名の採用で 100 人の応募者があった場合でも、一流大学ではないという理由だけで書類選考で落とすことはないと考えている。
- ・書類では「学生のときに何に力を入れたか」等の記述も見ている。

(翻訳 正会員 難波 美慧)

編集後記

私たち「アジアの新しい風(アジ風)」にも、逆風を感じさせる世界の潮流が気がかりです。「日本人ファースト」を旗印にする、日本の外国人排斥の動きは、米国の「Make Amerika Great Again」の動きと近似していて、アジ風が標榜してきた「多文化共生」とは真逆のナショナルスティックな動きです。

人は誰も自分に近いものに愛着を持つのが自然で、多文化共生は偽善的と受け取る人が、自己愛(自利)をあからさまに肯定しているのでしょうか。私自身も、「他利と自利」の間でウロウロすることがないとは言えませんが、信奉する生物学者・福岡伸一さんの言葉はいつも私を支えてくれて、アジ風の活動を前に進めることができました。「ヒトは、長い進化の末に唯一、遺伝子の呪縛(争え、奪え、縄張りを作れ、そして自分だけが増えよ)から脱することに成功した生物である」ので、絶望することはない、と福岡さんは言います。人類史は時計の振り子のように左右に揺れ動きながらも、「動的平衡(彼の学説)」を保ち続ける、と。

この別冊 I メイト便りは、アジ風の主たる活動—I メイト交流—がたどり着いた「多文化共生」の成果です。みなさんのお励まし、あるいはご批評など、お寄せいただけると今後の励みになります。

上 高子

介護という言葉には哀しさがつきまとう。「介護される」「介護する」と後ろに付く動詞によって立場に優位関係が生まれる。

10 年前に 100 歳になる夫の母を自宅で看取った。5 年間でベッドで横たわったままの母を見護る日々は介護保険を利用した。要介護 5 のメニューでは、訪問医師・訪問歯科・訪問看護・訪問入浴・理学療法士・ヘルパーさん・用品支給とフル活用し、手厚い世話ができてほんとうにありがたいことだった。しかし、受益者はやはり家族であり、当の母は家族のための制度だと譲らなかった。夫婦で外泊の用ができ「ショートステイを利用してください」と言った時、「私を殺して行きなさい」の返事を聞いた折は、口にした母も、言わせた私達もなんと哀しいことかと深く思った。これが介護なる真実なのである。

「若ければ道行きしらじ賂(わい)はせむ下への使ひ負(お)ひて通らせ」(万葉集巻 5—905)のように掌中の珠(宝)の幼い子どもの死を嘆く歌はあるが、老親の死や介護の歌は、万葉集にはない。老へば必ず訪れる死は諦念であった。

高齢者・病人などを介抱し、日常生活を助ける「介護」の意味は確かにその通りなのだが、もっと平かに言いかえる言葉はないものか、とずっと考えている。

『別冊』21 号を掌に受け読んでくださるみな様に、制作を引き受けてくださった PCC 大洋・岡吉明さまに、こころよりお礼申し上げます。

原谷 洋美

M E M O

別冊 Iメイト便り 第 21 号

「Iメイト交流の愉しみ」

ーアジアの多文化共生に向かってー

☐ 発行日 2025 年 10 月 20 日

☐ 発行者 NPO 法人

アジアの新しい風

〒 154-0016

東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414

H P : <http://www.npo-asia.org>

E-mail : new-wind2006@npo-asia.org

☐ 制 作 PCC 大洋
